ジョイスの時代のダブリン(12)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

63

(開始ページ / Start Page)

15

(終了ページ / End Page)

28

(発行年 / Year)

2011-10-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007611>

ジョイスの時代のダブリン (12)

結 城 英 雄

思 想

ストームとブリーヴン

『ユリシーズ』第17挿話「イタケ」では、ブルームが自宅にスティーヴンを招き、二人であれこれ親しくよもやま話を交わしている。年齢や教育や気質などの相違がありながらも、不思議なことに、二人を結ぶ事柄も多い。こうした二人の類似を鑑み、語り手は両者を融合させ、それぞれを新たに「ストーム」(17.549)と「ブリーヴン」(17.551)と命名する。血縁関係が不在であるにもかかわらず、精神的な父と子の関係を取り結ぶ物語として、『ユリシーズ』の巧みなクライマックスと思われる。両者ともに喪服を着用し、家の鍵を持たず、さらに不義の問題に憑かれている。二人はつゆ知らず共通した思考をしているのである。スティーヴンが展開する第9挿話のシェイクスピア論はその範例であり、ブルームの意識との接続を示唆するテーマとなっている。個人を構築する時代のイデオロギーの存在を考えるうえでも、好都合な参照枠の一つである。

実のところ、スティーヴンとブルームの関係をめぐっては、その他にも類似するところが色々ある。スティーヴンがマーテロ塔に寄寓するイギリス人ヘインズを評して「夜のほかは、別におかしいところはない」(1.177)と言うとき、そしてブルームが墓場で「肥った灰色鼠」(6.973)の姿に恐怖を抱くとき、両者ともに大飢饉にまつわるイギリスのアイルランド支配の言説に呪縛されているのである。同じく、スティーヴンが第2挿話でディージー校長の反ユダヤ主義に反論し、ブルームが第12挿話の酒場でユダヤ人と敵視されるとき、両者は偏狭な民族主義と対峙していると思われる。さらにスティーヴンが前日の東方の夢を回想し(第3挿話)、ブルームが東方への憧れを抱くとき(第4, 5挿話)、両者はオリエンタリズムという言説に囚われているだろう。またスティーヴンとブルームが「誰もいない」(第3, 8挿話)と無人の状況に安堵するとき、その背景には意識を威圧する宗教や政治といった権力が想定される。

19世紀から20世紀初頭にかけて、ダーウィン、マルクス、フロイト、ニーチェ、フレイザー、ソシュール、アインシュタインなどの思想家が登場し、生物学、歴史、精神分析、哲学、民俗学、言語学、物理学といった分野で、これまでの思想を覆していた。絵画や音楽や映画などの領域においても、ピカソ、バルトーク、エイゼンシュタインらが輩出し、芸術論議も喧しかった。都市生活をのぞいても、電車や自動車や電話などの発達もめざましく、時間や空間についての新しい見方が広まった。加えて性に関し

での革命的な思想が生まれた。こうした時代の到来は地方都市ダブリンにおいても認められ、スティーヴンやブルームの意識の形成に寄与していたことだろう。

ジョイスの時代のダブリンをめぐる、これまで歴史・風土、家庭生活、経済、政治、宗教、医療・福祉、教育、女性、娯楽、文学、性風俗といった項目を設定し、当時の暮らしや物の見方・考え方をたどってきた。本稿では、スティーヴンとブルームを結ぶ事項として、両者の意識の形成に力あるイデオロギーを中心に、思想という観点からいくつかの問題を探り、ジョイスの時代のダブリンについての論考をひとまず終了したい。これまでの議論を反復しながらも、二人を結ぶ無意識的な側面を取りあげるつもりである。人物たちのささやかな言動も時代と無縁ではない。

マーテロ塔

たとえば、スティーヴンは、同居人のマリガンとの対立のため、この日、自らが借りている住居のマーテロ塔に戻ろうとしない。塔そのものがヘインズの出現により、象徴的意味を帯びてきたためでもある。マーテロ塔は、ナポレオンの侵入に備え、1803年から06年にかけて、イギリスがアイルランドの沿岸に建てた一連の防御用の要塞である。イギリス人ヘインズ存在はその事実を想起させる。黒ミサを演じながら髭剃り用の石鹸の泡に向かって発する、「兵舎に戻れ」(1.19)というマリガンの命令にしても、軍事的隠喩が伏在していると思われる。

イギリスによるマーテロ塔の建設はアイルランドの蜂起とも関係があった。1798年のこと、アイルランドはまさしくフランスと連携して、イギリスからの独立を獲得しようとしたのである。その事情を描いたのがW. B. イェイツの『キャスリーン・ニ・フーリハン』である。1902年に上演され、多くの観客に感動を与えた。スティーヴンの記憶にも真新しいはずである。結婚を明日に控えたアイルランド西部の家庭に、一人の貧しい老婆が現れ、「友人」(フランス人)と共謀して、「四つの畑」(アイルランドの四地域)を略奪した「よそ者」(イギリス人)を追放してくれるよう、新郎に懇願する物語である。「貧しい老婆」は植民地支配で疲弊したアイルランドの化身で、アイルランド独立のあかつきには、女王として復活する設定だ。スティーヴンがマーテロ塔に現れたミルク売りの老婆を見て、つゆ知らず「貧しい老婆」(1.403)とつぶやくのもこうした背景による。

イギリスの批評家マシュー・アーノルドは、早くも『ケルト文学研究について』(1867)において、アイルランド人の特性を空想的で女性的と評した。そのアーノルドの批評を逆手に取り、アイルランド文学の新しい脈を探り当てたのがイェイツである。「貧しい老婆」の創造にも、アーノルドの思想に対立するようなイメージが付与されている。だがスティーヴンはそのような象徴的な解釈を拒否する。「貧しい老婆」は変身することのない「歯の欠けたキャスリーン」(9.36)にすぎないからだ。

にもかかわらず、スティーヴンの批判の矛先は、イェイツに対してではなく、むしろイギリス人のアーノルドに向けられている。マーテロ塔の胸壁で、スティーヴンは四圍を見つめながら、アーノルドの『文化と無秩序』(1869)を嘲笑するかのようになり、無秩序な喧騒が耳に入らず、芝を整える近視眼的なアーノルドそっくりな園丁の姿を想い描いている。アーノルドの唱える「文化」とは、国家の秩序を守るた

めの装置であり、個人を統合するシステムである。その思想の背景には、「無秩序」なアイルランドに対するイギリス支配という、暗黙の前提があったのだ。スティーヴンのイギリス嫌悪は彼一人のものではない。家庭を「よそ者」によって侵入されるブルームの心情と異なるものではない。

ヘインズの民話収集

ところで、ヘインズのアイルランド訪問の目的は、アイルランドの民話への関心による。第1挿話の朝食の場面では、スティーヴン、マリガン、ヘインズの3人の間で、ウェールズ地方のケルト伝説『マビノーギオン』、インドの聖典『ウパニシャッド』、さらには「包皮蒐集家」としての人間キリストへと話題が広がっている。このころまでには、すでにイエイツのアイルランド民話集も知られており、ゲール語の復活を唱導するダグラス・ハイドの『コナハトの愛の歌』(1895)も出版されていた。アイルランド文学ルネサンスは、自国のアイデンティティ確立の運動として、さらにアーノルドの文化論への対抗として、民話収集から始まったのである。

だが民話収集はアイルランド独自のものではない。イギリスの人類学者サー・ジョージ・フレイザーの研究もあった。フレイザーはローマ近郊の村にまつわる謎である、祭司職と櫛の木に宿る黄金の枝(ヤドリギ)をめぐる関連を解明したことで有名である。彼によると、黄金の枝を持って来たものには祭司に挑戦する機会が与えられ、勝者となった新しい人物が祭司職を継承するという儀式には、死と再生の神話が隠されているという。

フレイザーの『黄金の枝』の出版の開始は1890年で、最終巻は1915年に完結し、1935年には補遺まで刊行された。全13巻からなるその大作は出版前後から人々の話題にのぼり、文学者のイエイツ、ジョーゼフ・コンラッド、D. H. ロレンス、T. S. エリオットたちに大きな影響を及ぼすこととなる。19世紀末のイギリスには、フレイザーを生み出す知的風土があったのである。チャールズ・ダーウィンの『種の起原』(1859)の出版後、人間の起源に関心を寄せた人類学者は多く、フレイザーはそのうちでも屹立した存在であった。アイルランドの民話収集の幕開けも、フレイザーの学識に賛同するところから始まったと言っても過ぎることはない。ヘインズのアイルランド訪問はそうした時代の流れと軌を一にしている(Vickery)。

しかし、ヘインズが黒豹の悪夢に襲われたため、スティーヴンはその悪夢に恐怖を覚え、マーテロ塔を放棄する。この事態はヘインズが銃を携え、アイルランドにやって来ていることと関わっている。ヘインズの調査はまさしく、文明人=イギリス人、野蛮人=アイルランド人、という当時のイギリス側の考えに拠って立つものである。銃は護衛の手段であったろう。マリガンがスティーヴンに向かって語っているように、「やつの父親はズルー族にヤラッパを売るやら、いかさまを仕掛けるやら何やらで、現なまをつかんだ」(1.156)のである。ジョーゼフ・コンラッドの『闇の奥』(1899)で暴かれている、帝国主義の植民地支配を連想させる発言である。ヘインズの悪夢も、主人公クルツの最期の言葉、「地獄だ！地獄だ！」と無縁ではない。『闇の奥』をヴェトナム戦争に置き換えた、コッポラ監督の『地獄の黙示録』(1979)の最後の場面では、奇しくも、主人公の愛読書はフレイザーの『黄金の枝』とジェッ

シー・ウェストンの『祭祀からロマンスへ』(1920)となっている。

そもそもヘインズの夢に登場する「黒豹」は、スティーヴンの言動に由来する。このことは一目瞭然である。第1挿話での3人の交流からも推測できよう。マリガンによると、ヘインズはスティーヴンのことを「紳士」(1.52)だとは見做していない。実際、スティーヴンは、鏡に映る自分の姿に「逆立った髪。彼やほかのみんなが見る顔」(1.135)、とモンスターのようなイメージを読み取っている。またマリガンからも、朝食の「残りものは全部たいらげたんだろう」(1.524)、と囁かれるほど無骨に振舞っている。そしてヘインズに対しては、「いやらしい流し目をくれたり、イエズス会士の陰気な面であざ笑ったり」(1.495)し、別れ際の「あとで会おう」(1.730)という彼の言葉に返事もしない。シェイクスピアの『テンペスト』に倣うなら、ヘインズが植民者のプロスペロー、マリガンがその協力者のアリエール、スティーヴンが謀反人のキャリバンといったところである。

ヘインズがスティーヴンに恐怖を抱くのも当然である。彼はオクスフォード大学を出たばかりの紳士であり、「濃いお茶」(1.354)を苦手とし、「テニス用のシャツ」(1.479)を粋に着こなしている。そしてスティーヴンには、「われわれイギリスの人間は、きみたちを不当にあしらってきたと思っている」(1.648)と語っている。被植民者の怨念を恐れる慙懃な発言である。しかしながら、スティーヴンはマリガンを念頭に、「王位を奪うやつ」(1.744)とつぶやき、浜辺をあとにする。その言葉は、『オデュッセイア』や『ハムレット』の世界と同時に、フレイザーの『黄金の枝』への連想によるものであろう。マリガンの髪は「白樺のような色」(1.16)と語られ、彼の姿は「高位の聖職者を思わせる」(1.32)と描写されていた。アイルランド人のスティーヴンにとり、イギリス人のヘインズに協力するマリガンは、アイルランドの支配権を篡奪する背信者にほかならない。

ドラキュラとしてのイギリス人

こうしたイギリスとアイルランドの確執を語るには、単なる支配・被支配だけでは十分ではない。両者の間には修復不可能な歴史的断絶があったのだ。実は、1845年に主食のじゃがいもが胴枯病に冒され、イギリスの無策によりアイルランドで大飢饉が起こった。その結果、食料不足や疫病のために、百万人近くが死亡し、死体には鼠や犬が群がった。また百万人近くが海外へ移民することにもなった。そして移民はその後も恒常的に続き、19世紀半ばに八百万人を越えていた人口も、20世紀初頭には四百万人へと半減した。こうした構造的な歪みが社会のあらゆる部分に浸透し、大飢饉はアイルランドにとっての国家的なトラウマとなっていたのである。その記憶はまさしく地獄絵のように、人々の精神に無意識のうちに深く沈殿していた。

大飢饉についての記憶はいたるところで人々の意識を刺激していた。ブルームも昼食時、スティーヴンの栄養の悪そうな妹の姿から「じゃがいも」(8.42)の食事を想像し、またバートン食堂で昼食を食する市民たちの姿に大飢饉の犠牲者である「飢えた亡霊たち」(8.730)を重ねている。ディグナムを埋葬した折に墓場で目撃した鼠のことも、彼の意識に繰り返し現れる。こうしたブルームの独白を起源として、死者パディ・ディグナムにも、大飢饉の被害者のイメージが付与される。

実際、登場人物たちの無意識を形象化したような第15挿話では、ディグナムの亡霊は、「壊血病やみの顔」(15.1203)をし、「片方の耳の半分と、鼻の全部と、両拇指が、死肉を食らう鬼によって食いつけられている」(15.1208)。どことなくゴシック小説を思わせるグロテスクな描写であるが、大飢饉の折には、ビタミン不足のために壊血病が流行し、死体が動物の餌食とされることもあった。「パディ」はアイルランド人の表象であり、「ディグナム」は大飢饉に見舞われた西部ロスコモン出身者に多い名前でもある。

このように大飢饉のことがブルームの独白を契機として物語に回帰するとき、ブルームの所持する「お守り」(15.1313)の干からびたじゃがいもが想起される。それは妻の不義に悩むこの一日、何よりも夫婦の性的関係の換喩となっている。じゃがいもは、スペイン語とフランス語で、それぞれ「大地の罌丸」(turma da tierra)と「大地のりんご」(pomme de terre)の意である。ブルームの「しぼんだ父親」(5.571)のみならず、モリーの不義=罪をも示唆していると思われる。そしてじゃがいもは、大飢饉への連想とあいまって、イギリス支配下のアイルランドを、さらにはアイルランド人によって虐げられるブルームの象徴ともなる。その背景には、19世紀末に人気を博したアイルランド出身の小説家、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』(1897)の出版があった。この小説は『ユリシーズ』を覆うテキストの一つである。

ストーカーの『ドラキュラ』は、東方のトランシルヴェニアから、はるばるイギリスへとやって来る吸血鬼の物語である。世界の列強、ユダヤ人、コレラ菌などといった外国からの侵入者に対する、イギリスの無意識の恐怖の表象として読まれることが多い。だがそれだけではもちろんない。これまでの吸血鬼とは異なり、ドラキュラはまさしく征服者であり、物語には逆植民地化に対する恐怖が含意されている。そのかぎりでは、ドラキュラはアイルランドとの関係で捉えることもできる。そのグロテスクなイメージを大飢饉の惨状に負っているだけでない。大飢饉発生直後、アイルランドの貧民がイギリスへも数多く移民して行った事情にもよる。ドラキュラはその移民者に対する、イギリス人の恐怖の象徴でもあったのだ。アイルランドが、トランシルヴェニアと同様、西洋の中の東洋と呼ばれてきたことも想起しておきたい。

その一方、アイルランド側から眺めると、ドラキュラは逆にイギリスの表象となる。12世紀から始まる、長い植民地支配がそのことを物語っている。スティーンは、悪夢にうなされるイギリス人のヘインズを評して「夜のほかは、別におかしいところもないし」(1.177)と述べ、「黄いろい歯の婆あ」(3.232)のヴィクトリア女王こそその頭目であると独白している。同じくブルームも、当時のイギリス国王エドワード七世について、「赤い大理石が白くなるまでしゃぶる」(8.4)と皮肉っている。これらの発想の背景に、支配者=吸血鬼といった連想があることは明らかだ。かつてジョナサン・スウィフトは、アイルランドの貧困者を救うために、イギリスに彼らの子供たちを食肉として輸出するべきだという、逆説めいた「つつましい提言」(1729)を書いたことがある。

事実、イギリスは大飢饉という重大な事態を前にして、自由放任主義の経済政策の下、なすすべもなく手をこまねいていたのである。人口過剰は食料不足によって統制される、といったマルサス主義もそ

の背景にあったであろう。救済事業としてスープの配給も行われたが、プロテスタントへの改宗を条件とするという噂も流れた。ブルームも、「じゃがいも飢饉の当時に [……] 貧民の子供たちにスープを配ってプロテスタントに改宗させようとしたそうだ」(8.1071)、と独白している。また配給のスープを奪い合う人々をプロテスタントたちの見世物にしたこともあった。

こうしてアイルランド人の中には、さらに反英感情が植えつけられた。胴枯病が天災であるとしても、大飢饉はイギリスの仕業であると言われた。同じ胴枯病に見舞われながら、大飢饉に至ったのは、ヨーロッパの国々のうちでもアイルランドだけである。イギリス人がドラキュラと受け止められたことに間違いはない。テリー・イーグルトンは、大飢饉を称して、アイルランドの「アウシェビッツ」と呼んでいる (Eagleton)。この暗い過去について、アイルランド側で研究が進められるのは、1980年代に入ってからのことである。

ドラキュラで問題なのは、その被害者たちもまた吸血鬼へと変貌するところである。ブルームは昼食時のバートン食堂の客たちの貪欲な様子に驚き、その相貌に「歯と爪 [……] 殺せ！ 殺せ！」(8.703) といった吸血鬼並みのイメージを投影している。さらに彼は「アイルランド人の家はそれぞれの棺だ」(6.822) とも述べている。これは「イギリス人の家はそれぞれの城だ」をあてこすった表現で、第一義的には、ドラキュラは搾取者としてのイギリス人を指すが、第二義的には、イギリス人にその血を吸われたアイルランド人たちの謂になる。そのアイルランド人もまた吸血鬼に変貌して、同じく同胞を搾取することになる。それはイギリス支配下の市民の生態を暴いた『ダブリンの市民』にも明らかだ。「二人の伊達男」では、酒代もない男が下住みのメイドから金を巻き上げている。また「対応」でも、会社や酒場で不満を抱えて帰宅した男が、その鬱憤を無力な幼い息子に向けている。

ブルームも吸血鬼と化したアイルランド人の犠牲者の一人であるだろう。ユダヤ人の血を受け継いでいるだけで、知人たちから部外者扱いされ、その輪の外側に押し出されている。だが最大の皮肉は、アイルランドの反ユダヤ主義により、ユダヤ人一般が吸血鬼と受け止められていたことだ。19世紀末のイギリスでは、ユダヤ人と吸血鬼は同一視されていたのである。そしてイギリス人の反ユダヤ主義の言説は、そのままアイルランド人のものにもなっていた。イギリス人と同じくアイルランド人も、民族主義の名の下に、少数のユダヤ人の移民を「虱」とか「よそ者」(第12挿話)として敵視していたのである。ブルームの干からびたじゃがいもは、アイルランドのそうした悲哀の表象とも思われる。スティーヴンがアイルランドの民族主義を称して「腹子を食らう雌豚」(15.4582)と呼ぶとき、その背景には貧しい老婆であるキャスリーン・ニ・フーリハンの存在があっただろう。彼女も若者の血を渴望する吸血鬼である。このように、ブルームの所持するじゃがいもは、個人のお守りであるとともに、国家や家庭を取り巻く複合心理を暗示する要素の一つである。

警察の存在

さらに、イギリス統治下のダブリンにおいては、警察による市民に対する厳しい監視があった。警察にはしかも二つの組織があった。一つはダブリン首都警察で、ダブリン市およびその周辺の治安維持を

こととした。もう一つは王立アイルランド警察で、蜂起などを鎮圧する軍事組織として、ダブリン市以外のアイルランド全般を管轄した。どちらも 1836 年に現行の組織に編成され、どちらもイギリス支配の拠点であるダブリン城に本部が置かれていた。警官の最低身長は 1.8 メートルであり、その姿は市内の風物詩であるとともに、イギリスのアイルランド支配を示す最も顕在的な記号であった。アイルランドの蜂起の数々の失敗は、イギリスの諜報活動の能力の高さによるところが大きい。

ミシェル・フーコーはこうした権力装置を「パノプティコン」と呼んだ。ジェレミー・ベンサムが考案した監獄では、中央の監視塔からすべての囚人の監視が可能であるが、警察の権力装置も、まさしくパノプティコンと寸分違わない。同時にフーコーは、この装置を維持するためには、権力を行使するだけでなく、むしろ市民たちが監視されているという意識を内在化し、自分で自らを監視することが必要であるとも指摘する。市民はこの権力装置の中で、監視する自己と監視される自己という、二役を演じることになる。監視は監獄のみならず、学校、工場、兵舎、病院などといった、主要な社会施設にもあまねく及んでいるのである。

ちなみに、スタンダールの『赤と黒』(1830)の主人公ジュリアン・ソレルは、神学校の規律に縛られ、その規律から抜け出る道を探しあぐね、憂鬱な人生を送ることになる。彼は神学校を離れながらも、見通されているという意識を払拭できないのだ。またゾラの『ナナ』(1880)の表題の主人公も、娼婦時代に警察によって恐怖心を煽られている。そのため彼女は、首尾よく贅沢な生活ができるようになっても、わずかなことでその恐怖を心の中に再生してしまう。さらに権力の内在化という問題で忘れられないのは、カフカの『審判』(1925)や『城』(1926)である。両作品とも主人公 K の心理に沈殿する監視装置を描いている。

権力の内在化はブルームについても変わりはない。彼の深層心理が最も明らかになるのは第 15 挿話においてであるが、彼のささやかな行動にも監視の目が意識されている。彼は盲目の青年の感覚を理解するために、目をつむり自らの腹の感触を試みる際にも、「人はいない (No-one about)……ズボン吊りを直してるようなふりをすればいい」(8.1138)とつぶやく。「人はいない (no-one)」というのはブルームが頻繁に口にしている言葉である。

カトリック教会

権力ということからすれば、アイルランド国民の支配者はイギリスだけではなかった。ブルームはスティーヴンの妹ディリーの惨めな姿に目を留め、「神父たちには養う家族はないんだ。国の脂を食らって生きているわけさ」(8.32)と、国民の現実の生活に無頓着なカトリック教会を批難する。アイルランドにおいては、イギリス支配に加え、カトリック教会の支配があったのだ。そして両者には暗黙の盟約があった。大英帝国とカトリック教会によるアイルランド国民の搾取は、いずれも社会全体を包み込む問題である。

ブルームはさらに即物的な解釈も下している。過越祭第二夜に唱える詠唱「一匹の小山羊」をおぼろに想起しながら、国家間の殺戮の歴史を「みんなが互いに食い合っている」(7.214)と要約しているの

である。すでに彼は、キリストの体としてのパンを食べる聖体拝領を教会で目撃しながら、「死体のかげらを食べる。だから人食い人種にも受けるんだな」(5.352)とつぶやいていた。帝国主義支配や宗教支配が人食い人種の儀式と通底することを無意識に感知しているらしい。

スティーヴンもヴィクトリア女王の「黄色い歯」(3.232)から、人食い人種としての大英帝国の存在を暗示していた。また彼は「神は人となり、人は魚となり、魚はカオジロ黒雁になり……」(3.476)と輪廻転生を語りながらも、人=魚、魚=カオジロ黒雁、カオジロ黒雁=フェザーベッド山、という連想で、聖体拝領と「人食い人種」との類推を示唆していた。

大英帝国やカトリック教会を人食い人種と捉える思考は、すでに社会一般にも流布していたのである。人食い人種の問題は、大きな権力機構によって個人が圧殺されることの謂でもある。そこには「われわれ」と「かれら」という二項対立論理と同時に、「かれら」を排除しようとする力が潜んでいる。アイルランドの「歓待」の精神から逸脱する問題でもある。

実際、カトリック教会は政治に対しても権力を行使していた。アイルランドの自治権獲得運動の指導者チャールズ・スチュアート・パーネルは、アイルランドのために奮闘し、「無冠の帝王」(16.1496)と呼ばれた。しかしその栄光は人妻とのスキャンダルのために挫折した。そのパーネルの失脚に一役を買ったのがカトリック教会であり、道徳の名の下に、党首の座を降りることを勧告したのである。そして国民党の議員や選挙区の農民たちは、教会の教えに追随し、パーネルを見放した。それは「石を投げて殺したにも等しい」(16.1729)行為であった。

民族主義と反ユダヤ主義

ひるがえって、アイルランドの民族主義はイギリスの植民地支配への抵抗運動として始まったが、その大義名分にはやはり「われわれ」と「かれら」という、二項対立のイデオロギーが内包されていた。すなわち、「他者」の存在が前提とされていたということだ。第12挿話「キュクロプス」の酒場における「市民」と称される民族主義者も、「そろそろアイルランドにやって来て、国じゅう虱だらけになるなんて[……]うちのなかにこれ以上、他人にはいって来てもらいたくないねえ」(12.1141)と語っている。彼がユダヤ人の血を受け継ぐブルームを忌避するのも、そうした「われわれ」と「かれら」を区別する、外国人嫌悪の感情の現れである。

そして奇妙にも、「市民」の発想は、スティーヴンを前にしたイギリス系アイルランド人のディージー校長の発言といささかも変わらない。ディージー校長も、イギリスにいるユダヤ人を嫌悪して、「国家の生命を食らいつくす」(2.348)と批判していたのだ。民族主義者「市民」のみならず、イギリスの支持者ディージー校長も、「われわれ」と「かれら」という論理に拠って立っているのである。

いわば異邦人嫌いの単眼巨人キュクロプスがポセイドンの息子であるように、アイルランドの民族主義も、「海洋の支配者」(2.246)であるイギリスの帝国主義の申し子である。そもそも第12挿話「キュクロプス」の舞台となるバーニー・キアナン酒場は、「リトル・ブリテン通り」(「小さなイギリス通り」)に位置している。「おれたちは、力に対するに力をもってしようとするわけよ」(12.1364)と語られて

いるように、「市民」たちの反英思想は、イギリスの植民地支配の言説をなぞっているにすぎない。帝国主義も民族主義も単眼的な発想を基礎にしていたのである。

ジョイスがグリフィスやモーランたちの民族主義に疑義を呈したのは、まさしく彼らの反ユダヤ主義によるところが大きい。民族主義の言説が「他者」の存在を前提にしているとしても、グリフィスやモーランたちの「他者」に対する差別意識は、イギリス人やイギリス系アイルランド人のみならず、アイルランドに居住する少数派のユダヤ人に対しても向けられていたのである。

1904年1月、アイルランドの西部リムリックで、ジョン・クレイ神父が説教壇からユダヤ人排斥を説いたが、グリフィスもモーランも、それぞれの新聞でクレイ神父への支持を表明していた。グリフィスの『ユナイティッド・アイリッシュマン』は、「アイルランドのユダヤ人はいかなる点からも経済的な悪である [……] そしてユダヤ人はわれわれのなかの異邦人でありつづける」と書いた。またモーランの『リーダー』は、「ユダヤ人はカトリック教徒と異なり、勤勉で真面目だから危険なのだ」(Garvin) という、奇妙な記事を載せた。

アイルランドの反ユダヤ主義は、被植民者であるカトリック教徒たちの不安の表出でもあった。アイルランドは小国であり、1922年の自由国成立後も、「他者」への不安を克服できなかったのである。それどころか、外国人嫌悪はむしろ自由国成立後に一段と高まったとも言える。事実、その後のアイルランドは、民族主義を標榜する内向的な鎖国政策を布いていた。そしてデ・ヴァレラが1932年に政権を担うようになって以降、ユダヤ人の流入が極端に制限されることにもなった。入国を認められたのは資本を有するユダヤ人だけであった。グリフィスやモーランの反ユダヤ主義の影響がそのまま根づいていたのである。そのためアイルランドが中立政策を宣言していた第二次大戦の折には、ヒットラーの自殺をめぐって、首相のデ・ヴァレラ自らが哀悼の意を表明するほどであった。

キュクロプスとしての「市民」を理解するうえでは、ジョイスが影響を受けたという、イギリスの作家チャールズ・ラムの『ユリシーズの冒険』(1808)が示唆に富む。ラムの物語は、知恵者オデュッセウスと単眼巨人キュクロプスの対決の模様を冒頭に配し、小柄なオデュッセウスの勝利の賛美から始めている。そしてオデュッセウスによるキュクロプス制圧のこの物語は、大英帝国の植民地支配を正当化するものとして、19世紀末のイギリスの学校の教科書にも取り込まれていった。単眼巨人は食人種として「他者」の表象と捉えられていたのである。異文化との接触を欠いたキュクロプスに対する同情論も当時なくはなかったが、この単眼巨人が西洋文明の犠牲者として論じられるようになるのは、20世紀の半ば、世界各地の植民地で独立の気運が高まってからのことである。キュクロプスの側からすれば、オデュッセウスこそ「他者」にほかならない。

したがって、イギリスの植民地支配を経験したアイルランド側の視点に拠って立ち、「市民」の語る民族主義的な発言に同調する読者もいる。ジョイスの1907年のトリエステでの講演、「アイルランド——聖人と賢人の島」にも、「市民」と同じ主張が見受けられよう。「市民」が第12挿話で人口の減少を嘆き、産業の衰退を憂い、イギリスによる虐殺の歴史を回想するように、ジョイスもアイルランドの大飢饉の元凶をイギリスの無策に帰し、羊毛業の壊滅にイギリスの策謀を読み取り、17世紀のクロ

ムウェルたちイギリス軍による虐殺という忘れがたい記憶を喚起している。「市民」の発言の民族主義的な偏りも、アイルランド史を通観するとき、納得できる部分がそれなりにある。それに加えて、2001年9月11日の同時多発テロ事件以降、オデュッセウスとキュクロプスとの立場を逆転させた、新しい読みが可能になってきた。たとえば、インド出身の作家サルマン・ラシュデーは、アメリカ＝キュクロプス、イスラム世界＝オデュッセウス、という図式を想い描いている。

にもかかわらず、「市民」を中心とするアイルランドの民族主義には、やはりいかがわしさが感じられる。異国の血を受け継ぐブルームをめぐり、ユダヤ人として排斥しているからだけではない。イギリス、ドイツ、フランスといった西洋の列強の帝国主義を批難しながらも、その犠牲者となったアフリカ人も蔑視しているからだ。「市民」はブルームを名指して「あの白い目のカフィル族」(12.1552)と呼んでいるが、「カフィル族」はイギリスが制圧した南アフリカのバンツ族のみならず、黒人一般を指す蔑称である。アイルランドの民族主義には無意識の白人優位があったらしい。

イギリス人作家ジョーゼフ・コンラッドの『闇の奥』(1899)の出版により、コンゴにおけるベルギーの搾取に対して、ヨーロッパで批難が高まったが、一方で作者コンラッドは1899年から1902年にいたるイギリスのボーア戦争について口をつぐんでいた。同じくイギリス人作家のコナン・ドイルも、『コンゴの犯罪』(1909)でベルギーのコンゴ政策を指弾しながら、従軍記『偉大なるボーア戦争』(1902)ではイギリスの植民地政策を礼賛していた。ベルギーとイギリスのアフリカ支配の間に、大差があるわけではない。他国の搾取には敏感に反応しながら、イギリス人の視野には、戦火で踏みにじられ、殺されたアフリカの先住民の存在は目に入らなかったらしい。はからずもコンゴ問題の最初の告発者は、アイルランド人のイギリス領事、ロジャー・ケイメントであった。ベルギー領コンゴの黒人に自国民を重ねたのである。

19世紀最後の四半期において、アフリカはヨーロッパの列強により、ほとんどすべて分割統治されていた。そうした帝国主義国家の植民地政策のシステムを見抜いたのが、まさしくアイルランド人のケイメントであったわけである。そしてその50年後、仏領マルチニック出身のフランツ・ファノンにより、支配者の白人は被支配者の黒人の存在を可視化できない、と植民地支配の本質が指弾される。視野狭窄に陥っている「市民」に、そうした意味が理解できているとは思えない。

神智学

イギリスへの対立は政治にかぎらない。すでに述べたように、文学においても、イギリスの物質文明から離脱し、アイルランド独自の精神文化を模索していた。たとえば、ジョージ・ラッセルは、マダム・ブラヴァツキーの神智学に影響され、1886年にダブリン・ヘルメス協会を設立し、1904年当時は市内のドーソン会館で毎週木曜日に集会を開いていた。

会員にはイエイツの他、ジェイムズ・カズンズ、スーザン・ミッチェル、チャールズ・ジョンストン、ジョージ・ロバーツ、ハリー・ノーマンなどの文芸復興運動家たちがいた。そしてダブリン・ヘルメス協会は、アイルランド文学ルネサンスを支える組織として、雑誌『神智学研究者』も発行していた。ア

イルランドの人々の意識の古層にある、「大いなる記憶」への渴望こそ、この組織の原動力であっただろう。

神智学は靈魂の存在を信じ、個としての進化を遂げることを意図した。この発想に人々が惹きつけられたのは、近代化の圧倒的な物質主義の台頭を前に、靈的世界の優越が説かれたことにある。特にアイルランドでは、靈肉の二元論はそのまま、アイルランド対イギリスという図式へ転化された。神智学は移ろい霧散する物質世界の中で精神世界を模索するものであり、そのメシア思想は革命という夢も育くんだ。そのため類推思考も発達していた。アイルランド人は、エジプトの支配に苦しむユダヤ人、郷里を渴望するオデュッセウス、民を救出するジークフリートなどになぞらえられたのである。

その一方、文学通の法廷弁護士 J. J. オモロイは、彼らのことを「オカルト信者連」と呼び、ラッセルに私事する者を彼の愛用する「オパール」と「ひめやか」という言葉を使って、「オパールひめやか詩人ども」(7.784)と皮肉る。またナッソー通りでブルームも、詩人のジョージ・ラッセルと彼に同行する女性を前に、批判的な目を向ける。彼は二人の話しているオカルト的な問題については理解できないが、彼らが菜食主義レストランから出てきたと推測する。そして「野菜類と果物だけ。ビフテキは食べない。食べたりすると、未来永劫、牝牛の目に追いかける。あのほうが健康にいいと言うけど。しかしおならと小便ばかり……審美的な人間なんだ。あんなものばかり食べてたら頭のなかに詩的だかなんだかその種の波が立って不思議はないだろう」(8.534)とつぶやいている。

加えて、靈魂崇拜主義は肉体への嫌悪をかきたてていた。神智学の会員でありジョイスの友人でもあるグレッタ・カズンズは、新婚生活を恐れ、「子供を見るたびに、その子を存在させることになった、おぞましい状況が想起される」(Cousins)と日記に記している。第9挿話でスティーヴンがシェイクスピアの性的関係をことさら強調するのも、またマリガンが「人はそれぞれおのが妻または手のなかの新婚旅行」(9.1171)という自作に言及するのも、ラッセルたち文芸復興運動家たちの性に対する潔癖症を揶揄するためである。二人はドーソン会館に押し入った経験を持つ。

神智学の肉体への嫌悪と密接な関係があったのは、菜食主義と全国自警協会である。菜食主義は動物的欲望からの解放を目的し、全国自警協会は性にまつわる公的な取締りの組織であった。神智学はこれら二つの運動とも関わっており、カトリック教会の告解による性の検閲に対応する勢力を有していた。ブルームが「淋病の広告」(8.96)を近ごろ見かけないと不思議に思うが、全国自警協会の圧力の下、1889年に「猥褻な広告法令」が成立したためである。また彼は「確かに菜食主義は理にかなっている」と(8.720)と思うが、それは菜食主義の運動が社会一般に流通していたことを示唆している。

宮廷道化師

したがって、イエイツたちの運動に共鳴する文学者は少なかった。スティーヴンもその一人である。彼は教室で生徒にローマ史やミルトンの『リンダス』を教えながら、現在の臨時教師という立場に意識的になっている。芸術家を目指しつつも、挫折感に苛まれているためである。前作『若い芸術家の肖像』の最後で、ギリシア神話の工匠ダイダロスを父と仰ぎ、「現実と百万回も出会い、民族のいまだ創造さ

れざる良心を自らの鍛冶場で鍛える」と高言し、大陸へ旅立とうとした心意気は微塵もない。現在の彼は、海中に墜落したダイダロスの息子イカロスに我が身を重ね、慙愧の念に襲われている。ローマ史はスティーヴンにありえたかもしれない別様の自己を想像させ、『リシダス』はアイルランド海で溺死した友人を悼む哀歌として彼の心を打つ。現実的にならざるをえない。

事実、スティーヴンは生徒をからかうかのように、栈橋を「当て外れの橋」(2.39)と呼ぶ。自らの過去を顧みてのことで、そこに自嘲が込められていることは明らかである。栈橋は大陸への架け橋としての役割を果たさなかったのだ。今の彼に可能なのはこのような警句を弄することでしかない。しかし、ヘインズにその「名せりふ」(1.480)を語り、媚を売る場面を想像し、自らの姿を R. B. シェリダン、O. ゴールドスミス、オスカー・ワイルド、G. B. ショーなどといった、アイルランド出身の「宮廷道化師」(2.43)に重ねてしまう。一切合財がイギリスの抵当権下にある「質屋」(2.47)のアイルランドにありながら、イギリスの文壇におもねることに、やはり忸怩たるものがあるのだろう。

そのため、スティーヴンは宮廷道化師について、「なぜあんな役を選んだのかな？ 頭を撫でてもらうためだけじゃあるまい」(2.45)、と自問している。アイルランド人でありながらイギリスの文壇で名をなした、先輩作家たちの屈折した真意を測ろうとしているのである。ワイルドは「わたしは人種的にはアイルランド人であるが、イギリス人がわたしにシェイクスピアの言葉を話すようにさせた」と語っている。さらに、彼は「サクソン人はわれわれから土地を収奪し枯渇させたが、われわれは彼らの言葉を用い、そこに新しい美を付与した」(Kiberd)と述べている。

同じくジョイスも、「アイルランド人は自分たちのものでない言葉で表現せざるをえないが、その言葉に自分たちの才能を捺印し、文明諸国と栄光を競いあっている。その結果が英文学と呼ばれるものになる」(Kiberd)、と怒りを隠さない。ジョイスがイギリスの文壇で黙殺されたのは、イギリスに媚びることのないアイルランド人であったからだ。そしてこのジョイスの言葉そのままに、スティーヴンは、英文学の聖像であるシェイクスピアと競うかのように、第九挿話で『ハムレット』論を展開し、そのイメージを破壊してみせる。

スティーヴンが宮廷道化師のような役割を否定していることは明らかである。ワイルドがイギリスにおもねながらも、その犠牲者となったことは有名である。スティーヴンの「召使のひび割れた鏡」(1.146)という、アイルランドの芸術を評する言葉は、そのような彼の姿勢を反映している。実のところ、「ひび割れた鏡」という表現は、ワイルドの「嘘の衰退」(1889)の中で使用され、自然主義文学の謂として、唯美主義の観点から否定されていた。現実には写し出されるのではなく、むしろ、鏡＝言語という媒体によって創造されるのである。「ひび割れた鏡」はその事実を意識させてくれる。

この時代のイギリスでは、ステージ・アイリッシュマン、パディ、ヤフーなどといった蔑称で包括される、飲んだくれで、金に無頓着、向こう見ずなアイルランド人観が流布していた。こうしたイギリスとの対立を背景に、アイルランド人の G. B. ショーは『ジョン・ブルの別の島』(1904)でそうしたイメージを転倒させた。逆にイギリス人の D. H. ロレンスは、『チャタレー夫人の恋人』(1928)で、アイルランド人の芸術家(ジョイス?)を夫人の恋人役としては不適格者とした。

悪夢としての歴史

そのような状況を鑑み、スティーヴンは歴史の意味に懐疑を抱いている。ディージー校長の「大きな物語」としての歴史観を聞き、すかさず「歴史というのは……ぼくがなんとか目を覚ましたと思ってしている悪夢なんです」(2.377)と答えている。彼の念頭にあるのはアイルランドの悲惨な歴史であるだろう。第7挿話の新聞社の場面で、フィーニックス公園暗殺事件を耳にした折、彼は歴史について「決して目を覚ますことのない悪夢」(7.678)と独白している。アイルランドの歴史はイギリス支配に対する蜂起の歴史であったのだ。

このスティーヴンの意識は、いまだ南北分離のまま植民地時代の傷に苦しむ、現代のアイルランドにも当てはまる。だからこそ、ディージー校長の「われわれ」=「プロテスタント」に対し、もう一つの「われわれ」=「カトリック」を突きつけている。スティーヴンも大きな物語から自由ではない。彼は『若い芸術家の肖像』で個人を律する力を宗教、言語、民族と要約し、アイルランド人はそれらの「網」によって精神を形成されていると説いた。そして今また彼は、大英帝国、民族主義、ローマ・カトリック教会という大きな物語に直面しているのである。

スティーヴンの悪夢としての歴史は当時の一般論であった。H. G. ウェルズの『タイム・マシン』(1895)を想起してもいい。この作品は時間飛行家(タイム・トラベラー)が、タイム・マシンに乗って80万2千年後の未来へたどりつく物語である。彼がその未来世界で目にするのは、地上人エロイと地下人モーロックという、二極化された社会である。エロイが繊細で虚弱な人間であるのに対し、モーロックは頑強で野蛮な人間である。両者は貴族と労働者という、当時のイギリスの階級制度の行く末である。実権はモーロックが握っており、エロイは彼らの食料にすぎない。そして時間飛行家がさらに先の3千万年以上先の世界で目にするのは、人類の滅亡した世界である。まさしく悪夢としての歴史の終末が描かれている。

当時、西洋は帝国主義と植民地政策で繁栄しながらも、自らの文明の没落を意識し始めていた。啓蒙という名の下に世界に文明の光を点すどころか、自ら意識の奥に併せ持つ混沌に気づいたのである。R. L. スティーヴンソンの『ジキル博士とハイド氏』(1886)は、その問題を簡潔に描いたすぐれた作品だ。「ジキル博士」は博愛主義に奉じる医者であるが、その反自我の「ハイド氏」は好色で邪悪な人物である。この作品は人間の抱える時代の闇を照らし出している。言い換えるなら、大英帝国も、自らが拠って立つ「われわれ」と「かれら」という、二項対立を再考せざるをえなくなったのである。

マックス・ノルダウの『退化論』(1893)を嚆矢とした終末論が説かれ始めるのは、そのような状況下でのことであった。それは世紀末のデカダンスに対する批判であり、中流階級の健全な道徳論の弁明である。逆に、ホルブルック・ジャクソンは、『一八九〇年代』(1913)で、世紀末が活気に溢れる時代であったと定義して、ノルダウの考えを論駁した。世紀末の論争は様々であるが、それでも歴史に憑かれていた時代であることに変わりはない。そして否応なく歴史の意味を問う第一次世界大戦が勃発する。スティーヴンの悪夢としての歴史観にはそうした時代背景もある。「悪夢としての歴史」という言葉は、第一次大戦勃発直後にヘンリー・ジェイムズが使用し、さらに遡ってはジュール・ラフォルグが案出し

た言葉とされている (Spoo)。

実は、スティーヴンも、「ピュロスがアルゴスの町で老婆の手にかからなかったら、またユリウス・カエサルが刺し殺されなかったら」(2.1046)と自問している。彼の念頭にあるのは歴史から排除された別様の物語の可能性である。歴史とは様々な潜勢力のせめぎあいの結果生じる事象であり、その責任を担う神とは「お粗末に書き飛ばした劇作家……《ディオ・ボイア》、つまり死刑執行人としての神」(9.1049)にすぎない。しかしながら、「現実態」としての歴史に対し、別の「可能態」を想定するとき、スティーヴンは、悪夢としての歴史からの解放を模索しているのかもしれない。そのために、彼は現実の多様性を承認しなければならない。ブルームという人物はその問いへの回答であるだろう。「ストゥーム」と「ブリーヴン」の物語は、二人の人物のみならず、想像の共同体を読み解く鍵でもある。

参考文献

- Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso, 1983.
- Cousins, James H. and Margaret E. *We Two Together*. Madras: Ganesh, 1950.
- Eagleton, Terry. *Heathcliff and the Great Hunger: Studies in Irish Culture*. London: Verso, 1995.
- Garvin, Tom. *The Evolution of Irish Nationalist Politics*. New York: Holmes & Meir, 1981.
- Gibson, Andrew. *Joyce's Revenge: History, Politics, and Aesthetics in "Ulysses."* Oxford: Oxford University Press, 2002.
- Hagena, Katherine. "Towers of Babble and Silence." In Anne Fogarty and Timothy Martin, eds., *Joyce on the Threshold*. Florida: University Press of Florida, 2005.
- Innes, C. L. *Woman and Nation in Irish Literature and Society 1800-1935*. London: Harvester Wheatsheaf, 1993.
- Kiberd, Declan. *Inventing Ireland: The Literature of the Modern Nation*. London: Jonathan Cape, 1995.
- Mullin, Katherine. *James Joyce, Sexuality and Social Purity*. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- Platt, Len. *Joyce and the Anglo-Irish: A Study of Joyce and the Literary Revival*. Amsterdam: Rodopi, 1998.
- Rickard, John S. *Joyce's Book of Memory: The Mnemotechnic of "Ulysses."* Durham: Duke University Press, 1999.
- Spoo, Robert. *James Joyce and the Language of History: Dedalus's Nightmare*. Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Spurr, David. *Joyce and the Scene of Modernity*. Florida: University Press of Florida, 2002.
- Vickery, John B. *The Literary Impact of "The Golden Bough."* Princeton: Princeton University Press, 1973.
- Wurz, James F. "Scare More a Corpse: Famine Memory and Representations of the Gothic in *Ulysses*." *Journal of Modern Literature*, vol. 29, no. 1, 2005.
- 富士川義之『英国の世紀末』新書館, 1999年。
- 結城英雄「『ユリシーズ』を読む ― 百のQ & A」①～⑫, 『すばる』(2007～2011)。